

日本語学習者の「の」の過剰使用の要因に関する一考察

— 縦断的な発話調査に基づいて —

奥野 由紀子

(2001年9月30日受理)

A Study of Overuse of "NO" in the Acquisition of Japanese as a Second Language
— A Longitudinal Study Based on Oral Interviews —

Yukiko Okuno

It is a relatively known fact that children acquiring Japanese as a first language (L1) tend to overuse "NO" as in "*ookii no kuruma" instead of the correct form, "ookii kuruma (= a big car)". This overgeneralization is also reported to have been observed in the utterances of adult learners of Japanese as a second language (L2). There are two different opinions about this phenomenon. First, this is one of the developmental errors so that learners make mistakes in spite of their native languages. Second, it could be the possibility of language transfer from the Chinese language.

This paper discusses these two different opinions by conducting an investigation including 22 adult learners of Japanese learning in Japan. They were interviewed individually twice, at the beginning and at the end of the course. Each interview took about thirty minutes.

These are the findings;

- (1) Some learners take "unit formation strategy", one of the language processing strategies, in the overuse "NO".
- (2) For Chinese learners, more errors are found by the end of the semester of the advanced level compared to the beginning of the intermediate level.
- (3) Chinese learners overuse "NO" as the modifier for all I-adj., Na-adj. and verbs.

The study concludes that (1) shows some of the errors could not be caused by language transfer and it supports the first hypothesis. On the other hand, (2) and (3) show the evidence that might be caused by transfer from their native language, Chinese, which supports the second hypothesis.

Keywords: Overuse of "NO", language transfer, language processing strategy, longitudinal study

キーワード：「の」の過剰使用、言語転移、言語処理のストラテジー、縦断的研究

1 本研究の目的

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：縫部義憲（指導教官）、多和田眞一郎、町博光、大浜るい子、迫田久美子

Corder(1983)によると、中間言語研究の中には言語転移に関して次の二つの流れがある。

- (1) 母語に関係なくほぼ同じ発達順序を辿る。
- (2) 発達順序は母語に左右される。

「大きい車」のような「の」の過剰使用は幼児の第一言語習得過程にも、成人の第二言語習得にも見ら

れる現象であることから、言語転移ではなく普遍的な発達過程であるという説と、初級から超級^{註1}までの横断的な発話資料の分析の結果から言語転移を示唆しているという説とに分かれている。そこで本研究では縦断的な発話資料、特に今まで扱われていない上級を含めた資料に基づき、学習者の「の」の過剰使用は母語の違いに関わらず見られるのかどうかという問題について、誤用の要因を質的に検討することを通して考察し、さらに新たな知見を示すことを目的とする。

2 先行研究における問題点

母語として日本語を習得する幼児の発話に、「の」の過剰使用の時期が存在することが第一言語習得研究において指摘されている(永野1960; Clancy 1985; 横山1990)。

また、白畑(1993a; 1993b; 1994)は、韓国語を母語とする幼児1名とタイとマレーシアの成人各1名の日本語学習者を対象とした、初級から中級にかけての縦断的な発話調査の結果、どの学習者にも「の」の過剰使用が観察されることから、「の」の過剰使用は、母語や年齢に関係なく起こる現象であると報告している。そして、第一言語習得研究からの報告と合わせて、「の」の過剰使用は日本語の習得過程において、第一言語習得か第二言語かという相違や年齢差を問わず存在する普遍的な現象である可能性が高いと結論づけている。

これに対して、迫田(1999)は、成人の英語・中国語・韓国語を母語とする初・中・上・超級の日本語学習者の横断的な発話資料(KYコーパス^{註2})を分析した結果、中級ではどの母語話者にも「の」の過剰使用がみられるが、中国語母語話者は上級になっても他の母語話者に比べて「の」の過剰使用による誤用が多く見られることを指摘し、「の」の過剰使用は母語によって異なる可能性を示した。

両者とも会話からの抽出という同じ方法を用いているにも関わらず、なぜこのような見解の違いが生まれたのであろうか。

その原因として、第一に、対象とした学習者の習得レベルの違いが挙げられる。白畑は韓国語を母語とする幼児1名と成人のマレーシア語とタイ語を母語とする各1名ずつの縦断データを用いているが、調査時における到達レベルは被調査者の背景や発話データから、中級であると考えられ、上級以上のレベルは考察の対象とされていない^{註3}。そのため、迫田(1999)の初級から超級までを対象とした横断的資料の分析結果におい

て、上級には母語による違いが存在する可能性があるという、白畑にはない結果が得られたのだと考えられる。

第二に、扱った言語の違いが挙げられる。白畑が対象とした韓国語・タイ語・マレー語は、日本語と同様に、名詞句における形容詞や動詞を伴う修飾部と被修飾部の間に格関係を示すような「の」に相当する要素を必要としない。白畑は「言語転移ではない」と結論づける根拠として、母語において形容詞や動詞の後に、「の」に相当するものを挿入しないにも関わらず、日本語の習得過程において「の」の過剰使用が見られることを挙げている。しかし母語に「の」に相当する言語を持つ学習者を対象に含めなければ、本当に母語に関わらず同様に見られる現象である(言語転移ではない)とは言えない。現に、「の」に相当する「的」が修飾部と名詞の間に必要な中国語を含む横断的資料では、上級において、中国語を母語とする学習者は他の母語話者に比べ「の」の過剰使用による誤用を多く産出しており、中国語の言語転移の可能性が示唆されている。

このように、迫田(1999)の横断的資料の分析において、初級から超級という発達段階を考慮したこと、日本語とは異なる構造を持つ中国語を含めたことによつて、白畑の結果からは見えてこなかった言語転移の可能性が示されたと言える。

しかし、横断的資料だけでは、本当に中級で出現していたものが上級になっても残っているのか、消滅したのかという個人内の変化が不明であり、上級に到達する学習者を含めた縦断研究を行う必要があると考える。言語転移は、その上でさらに検証を重ねた上で論じなければ結論が出ない慎重に扱うべき課題と言えよう。

しかしながらその一方で、白畑の結果と共に迫田の分析からも、中級においては母語に関わらず「の」の過剰使用が観察されており、ある時期において母語に関わらず見られる現象であるというのは共通した見解のようである。つまり、「の」の過剰使用による誤用は、言語転移か普遍的な現象かという二者択一的な問題ではなく、両方の側面を持った問題であることが示唆されており、母語に関わらず見られる部分とは何か、母語による違いがあるのならば、それはどのような側面において存在し現れるのか、という点を明らかにしなければならぬ。

そのためには、誤用が起きる原因について、学習者の言語処理のストラテジーや、語彙の増加や文構造の複雑化に伴う問題という言語転移以外の観点からも質的に検討し、探る必要がある。以下に先行研究の問題点をまとめる。

- (1) 縦断的な調査データによる研究の不足
- (2) 特定レベルの傾向が、横断的な調査だけでは個人内の変化がわからず不十分
- (3) より多くのデータによる「の」の誤用の具体的な傾向が不明(例:修飾部の品詞の差や、特定の語による固まりによる差、語種による差など)

本稿では、以上を踏まえ、上級を視野に入れた縦断的な調査を実施し、検討考察を行う。

3 発話調査

3-1 調査の前提

本稿では、何も入らないゆ標識の場所に「の」を使用する誤用、もしくはナ形容詞の「きれいな」とすべき活用語尾を「きれいの」と「の」を使用する(1)(2)のような誤用を対象とする^{註4}。「の」を使うべき場所に使っていない(3)のような脱落の誤用や、(4)のような他の助詞との混合は本稿の対象としない。

- (1) 何もないの街 (中国・上級)
- (2) 伝統的の服着ます、踊ります (フランス・中級)
- (3) 通訳(→)の勉強の仕方はおもしろい (スペイン・中級)
- (4) お金の(→を)消費することです(英語・上級)
(誤用例は発話資料より採集)

3-2 調査の概要

コースの学年開始時と終了時^{註5}という縦断的な二時点において行われたACTFL OPIに基づくテストとの会話^{註6}を録音、レベル判定、文字化したものを資料とする。学年開始時と終了時の時間的間隔は約10ヶ月である。被調査者は日本国内の大学の留学生別科に在籍する学生22名(中国語母語話者11名、英語母語話者6名、仏語母語話者1名、西語母語話者1名、独語母語話者3名)である。表1に被調査者の母語とOPI判定の推移を示す。

次に、正用・誤用を含め「の」の使用に関して、表2の分類に基づき^{註7}、正用は「○」、^{註8}「の」の過剰使用による誤用の場合は「●」、出現しなかった場合は「-」で表3、表4に表示する。その表示はそれらが会話の中に一回でも出現したことを表している。

3-3 調査の結果(表3、表4参照)

表1 被調査者のレベルの推移

時期 レベル 被調査者	学年始め レベル	学年終わり レベル
中国1	初上	中上
中国2	初下	中下
中国3	初下	中下
中国4	初下	中下
中国5	初下	中下
中国6	中中	中上
中国7	中上	上下
中国8	中中	上中
中国9	中下	上下
中国10	上下	上上
中国11	上下	上上
英語1	初上	中中
英語2	初下	中中
英語3	中上	上中
英語4	上下	上中
英語5	中下	中上
英語6	中中	上下
仏語1	中下	中上
西語1	中中	上下
独語1	中上	上下
独語2	中中	上上
独語3	上下	上中

(注)

- 1. 被調査者の中には日本語以外の第二言語を話す学習者がいるが、今回は母語で判断することとする。
- 2. レベルは初級・中級・上級とその下位レベル(上・中・下)を表している。

表2 名詞句における「の」の使用の分類

分類	例文
NPのNP(名詞句+の+名詞句)	韓国のソウル(正用)
IAのNP(イ形容詞+の+名詞句)	大きい車(誤用)
IANP(イ形容詞+名詞句)	大きい車(正用)
NaAのNP(ナ形容詞+の+名詞句)	きれいのところ(誤用)
NaANP(ナ形容詞+名詞句)	きれいなところ(正用)
VPのNP(動詞+の+名詞句)	昨日いったの店(誤用)
VPNP(動詞+名詞句)	昨日行った店(正用)
他(上記以外の「の」の付加)	おいしそうですの感じ(誤用)

3-4 結果のまとめ

学年始めと学年終わりの各レベルの「の」の過剰使用の縦断的な変化、各母語話者の傾向を通して明らかになった結果を以下にまとめる。

- (1) 全体を通して、誤用は正用と同時に観察され、誤用のみで使用されることはほとんどない。
- (2) 学年始めに初級で、学年終わりに中級にあがった学習者は、母語に関わらず「の」の過剰使用がみられ(7人中5人)、中級になるに従い、「の」の過剰使用がみられる傾向がある(表3参照)。
- (3) 学年終わりの上級学習者において、中国語母語話者は他の母語話者と比較し、「の」の過剰使用が

多くみられる(表4参照)。

- (4) 学年始めの中級の時点では「の」の過剰使用がみられない学習者であっても、学年終わりの上級になって出現する学習者が中国語母語話者に多い(表4参照)。
- (5) 個人内の「の」の過剰使用をみると、上級中国語母語話者は修飾部がイ形容詞、ナ形容詞、動詞という複数の種類において、「の」過剰使用が見られる傾向にあるが(6名中5名)、他の母語話者は複数の品詞にまたがって出現することはほとんどなく、異なった傾向にある(表4参照)。

表3 初級→中級のレベルの結果

学年始め										学年終わり									
被調査者・レベル	分類									被調査者・レベル	分類								
	NPのNP	IAのNP	IANP	NaAのNP	NaA NP	VPのNP	VPNP	他	NPのNP		IAのNP	IANP	NaAのNP	NaA NP	VPのNP	VPNP	他		
中国1・初上	○	—	—	—	—	—	—	—	—	中上	○	—	○	—	○	—	○	—	
中国2・初下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中下	○	●	○	●	○	●	○	●	
中国3・初下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中下	○	●	○	—	○	—	○	—	
中国4・初下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中下	○	●	—	—	○	●	—	—	
中国5・初下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中下	○	—	—	—	—	●	○	—	
英語1・初上	○●	—	○	—	—	—	—	—	—	中中	○	—	○	—	○	—	○	—	
英語2・初下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中中	○	●	○	—	○	●	○	—	

表4 中上級のレベルの結果

学年始め										学年終わり									
被調査者・レベル	分類									被調査者・レベル	分類								
	NPのNP	IAのNP	IANP	NaAのNP	NaA NP	VPのNP	VPNP	他	NPのNP		IAのNP	IANP	NaAのNP	NaA NP	VPのNP	VPNP	他		
中国6・中中	○●	—	○	—	○	—	○	●	—	中上	○●	—	○	●	○	—	○	—	
中国7・中上	○	—	○	●	○	—	—	●	—	上下	○	●	○	●	○	●	○	—	
中国8・中中	○	—	—	—	○	—	○	—	—	上中	○	—	○	—	○	●	○	—	
中国9・中下	○	—	○	—	○	—	—	—	—	上下	○●	—	○	●	○	●	○	●	
中国10・上下	○	—	○	—	○	—	○	—	—	上上	○	—	○	●	○	●	○	—	
中国11・上下	—	—	○	—	○	—	○	—	—	上上	○	●	○	●	○	—	○	—	
英語3・中上	○	●	○	—	—	—	○	—	—	上中	○	●	○	—	○	—	○	—	
英語4・上下	○	—	○	—	○	—	○	—	—	上中	○	●	○	—	○	—	○	—	
英語5・中下	○	—	○	—	○	—	○	—	—	中上	○	—	○	—	○	—	○	—	
英語6・中中	○	—	○	—	○	—	○	—	—	上下	○	—	○	—	○	●	○	—	
仏語1・中下	○	●	○	—	○	—	○	—	—	中上	○	—	○	●	○	—	○	—	
西語1・中中	○	●	○	—	○	—	○	—	—	上下	○	—	○	—	○	—	○	—	
独語1・中上	○	—	○	—	○	●	○	—	—	上下	○	—	○	—	○	—	○	—	
独語2・中中	○	—	○	—	○	—	—	●	—	上上	○	—	○	—	○	—	○	—	
独語3・上下	○	—	○	—	○	—	○	●	—	上中	○	—	○	—	○	—	○	●	

4 分析と考察

4-1 横断研究との比較

ここでは同じOPIを用いた発話資料の分析である迫田(1999)の横断的調査の結果と比較する。以下に横断的調査の分析結果を挙げる。

- (1) どのグループも中級の学習者に多く観察される。
- (2) 誤用と正用が同時に観察される場合も多く、必ずしも誤用のみで使用されるとは限らない。
- (3) 超級レベルではすべてのグループで「の」の付加による誤用は消滅している。
- (4) 中国語母語話者には、上級において、他の母語

話者よりも多く観察される。

- (5) 母語の違いに関わらず「イ形容詞+の+名詞」の誤用が多い。

上記の横断的調査の結果と今回の縦断的調査の結果を比較すると、母語に関わらず初級ではまだ名詞句そのものの出現が少なく「の」の使用自体がみられないが、中級になると誤用が観察され、(1)についての結果が一致している。また、(2)の誤用と正用が同時に観察されるという点においても一致した。ここから、初級から中級にすすみ、名詞句が使用されるようになると母語に関わらず「の」の過剰使用が出現し、正用と混在す

ることがわかる。

今回の縦断的調査では超級に到達した学習者がいないため、横断で示された(3)の、超級になると誤用が消滅するという仮説を縦断的に確認することはできないが、(4)の、上級レベルでは、他の母語話者と比較して中国語母語話者に「の」の過剰使用による誤用が多いという点も一致した。

しかしながら、今回の縦断的調査によって、横断では見えなかった新たな側面も示された。それは、学年始めの中級の段階において「の」の過剰使用が観察されなかった学習者であっても、学年終わりの上級になって誤用が出現したり増加する傾向にある学習者が中国語母語話者に多かったということである(6名中5名)。なぜレベルがあがり、日本における時間的経過を経た時期において、誤用が増えるのであろうか。この点に関しては、今後更に検討しなければならない。

また、横断的研究の結果(5)では、母語に関わらずイ形容詞に多く「の」の過剰使用がみられるとあるが、本研究の結果では、イ形容詞に多いというよりも中国語母語話者は他の母語話者と比較し、複数の品詞にまたがって誤用が見られるという結果が示された。使用品詞や語彙と「の」の過剰使用との関係を調べる必要があると言える。

以下に今回の縦断的な調査の結果、明らかとなった新たな知見をまとめる。

- a. 中級レベルで見られなかった「の」の過剰使用が、10ヶ月後の上級レベルの段階になって、出現する学習者が中国語母語話者に多く観察された。
- b. 中国語母語話者は他の母語話者と比べて、「イ形容詞+の+名詞」のみならず複数の品詞に広範囲に観察された。

4-2 言語処理のストラテジー

横断的分析においても縦断的分析においても、「の」の過剰使用が母語に関わらず見られる段階があるということは、「の」の過剰使用には、言語転移以外の要因が関わっていると考えられる。迫田(1999)は、横断的な発話資料の中から、「の」の過剰使用の誤用例を抜き出し観察した結果、ある名詞句パターンで誤用が多いことを指摘した。それは、「もの・こと」を「～のもの・こと」(例: 売れるのもの・好きのこと)、「ほう」を「～のほうがいい」(例: 薄いのほうがいい) とするというものであり、「～のほうがいい」「～のこと」を固まりで覚えているために起こるのではないかと推測している。つまり、「家族のこと」「世界のもの」や「肉のほうがいいです」と同様に、形容詞や動詞によって名詞を修飾する場合に「楽しいのこと」「明るいもの」「朝

早いほうがいい」という「の」の過剰使用による誤用を生み出すのではないかという仮説である。しかしながら、被調査者の全体的な誤用の傾向からでは、本当に一個人内において「～のこと」や「～のほうがいい」を固まりとして捉えて表出しているのか否かが不明である。

そこで、本研究では「の」の過剰生成の原因として、学習者の言語処理のストラテジーが関わっているかどうかを、個人内の「の」の過剰生成による誤用と正用を観察することによって確かめることとする。

その結果、個人内において固まりで使用されている傾向が4パターン観察された。以下に具体例を挙げる。それぞれのパターンには、すべての使用例を示している。

- (1) 「とき」の場合 (中国 5-2・中級)^{注8}
 - a *^{注9}大学入ってのとき僕は歴史勉強します
 - b 僕は高校のとき理科好きです
 - c 大学のときできます
 - d 子どものとき、試合のとき誰にも勝ちました
 - e 高校生のときいちばん練習します
 - f 学校の勤務のときいつもバスケットボールを試合しました
 - g 穴にいれるときちょっと難しいね
- (2) 「ために」の場合 (英語 2-2・中級)
 - a *話すためにね、日本語はほんとに発音がすごい難しくない
 - b *外国語を学ぶために
 - c *学ぶためにね、すごいいっぱい毎日、一日中ほんとの日本語だけが必要ですね
 - d *漢字書くために、ほんとにすごい、ちょっとだけできる
 - e チェックのためにいいトーク
 - f チェックのために、本読んでましたね
 - g チェックのためにすごい便利
 - h 漢字の勉強のためにがんばりました
 - i 友達のために日本にすんでいる
- (3) 「ほう」の場合 (中国語 7-2・上級)
 - a *毎週一緒にしますけど彼は汚いの方
 - b 京都の方が大きい
 - c 日本語の方が上手
 - d アメリカの方が混ざったような感じ
- (4) 「ような」の場合 (中国語 7-2・上級)
 - a *アメリカの方が混ざったような感じ
 - b 暴走族のような問題があります

- c 国際結婚のような感じ
- d ボーイフレンドのような感じ
- e 恋人のような感じ

上記の個人内の正用と誤用例を見ると、学習者は「～とき」の場合、7例中6例「のとき」を用い、「～ために」の場合は「のために」を9例中9例、同様に、「のほう」を4例中4例、「のような」を5例中5例、「の」を共起した形式で使用しており、それぞれのフレーズを固まりとして捉えていることが窺える。そのような固まりで捉えているフレーズにおいて修飾部に形容しや動詞がきた場合、「の」の過剰使用による誤用が産出されたと考えられる。これは被調査者の全体的な誤用の傾向から導き出した迫田(1999)の仮説を支持する結果と言えよう。

このような固まりで処理する学習者の戦略による誤用の産出は、「の」だけに見られるものではない。「じゃない」全体を否定辞と捉え、否定を表す際に、イ形容詞や動詞にまで付加するために「楽しいじゃない」という誤用を生み出す過程(家村・迫田2001)や、「位置を示す名詞(例：中・前)＋に」「地名や建物を示す名詞(例：東京・食堂)＋で」の固まりを形成し、後続の動詞を考慮することなく助詞を選択した結果、誤用を産出する(迫田2001)というものと同様である。日本語の習得過程だけではなく、英語の習得過程においても“don't”や“can't”を分析できないひとかたまりの形態として、文の全体に否定の機能を持たせる段階があること(Ellis 1994)などが報告されている。

このように学習者がある習得段階において、それ自体あまり意味を持たない格助詞や冠詞を隣接する名詞と共に一かたまりの固まり(ユニット)で処理する戦略は「ユニット形成の戦略」(迫田2001)とよばれており、中間言語の一つの特徴であると考えられる。しかし、今回の観察からは、そのような言語処理の戦略が見られた学習者は限られており、どの表現が固まりと捉えられているかという点においても個人差があることが示された。本研究は発話資料からの観察であるため、他の学習者が使用しているかどうか、「の」の過剰使用に関わるフレーズが今回観察された表現パターンのみなのかは不明であり、今後さらなる手続きが必要である。

4-3 同一語彙内における正誤のゆれ

横断的・縦断的な調査結果から、誤用も正用も同時に産出されることが明らかとなったが、それは同じ語彙や表現を用いている場合であっても見られるのであろうか。4-2で確認された言語処理の戦略は個人内の正用と誤用に関わらずあるフレーズを同時に観

察することにより、後続名詞による固まりが、誤用の原因となっている可能性が高いことが示唆されたが、ここでは、「の」の過剰使用が見られる修飾部の同一語彙・表現において、正用でも出現しているかどうかを調べた。表5に修飾部における同一語彙・表現において誤用と正用のゆれが観察されものについて、◎で表示する。その表示はそれらが会話の中に一つでも出現したことを表している。

表5 同一語彙内における誤用と正用のゆれの有無

時期 被調査者 レベル	学年始め	レベル	学年終わり
中国1 初上	—	中上	—
中国2 初下	—	中下	◎
中国3 初下	—	中下	—
中国4 初下	—	中下	—
中国5 初下	—	中下	—
中国6 中中	—	中上	—
中国7 中上	—	上下	◎
中国8 中中	—	上中	—
中国9 中下	—	上下	◎
中国10 上下	—	上上	◎
中国11 上下	—	上上	◎
英語1 初上	—	中中	—
英語2 初下	—	中中	—
英語3 中上	—	上中	—
英語4 上下	—	上中	—
英語5 中下	—	中上	—
英語6 中中	—	上下	—
仏語1 中下	—	中上	◎
西語1 中中	—	上下	—
独語1 中上	—	上下	—
独語2 中中	—	上上	—
独語3 上下	—	上中	—

この表から、修飾部における同じ語彙の中に、誤用も正用も産出されるという「ゆれ」が存在していることがわかる。以下に具体例を示す。

- (1) 中国 2-2 中級
 - a * 仕事は服をつくるの会社
 - b おべんとをつくるお店
- (2) 中国 7-2 上級
 - a * 色々な民族のできる人もいるけど
 - b 色々な民族がありますけど
 - a * 彼の冷静の行動見ると私の怒りもだんだん減ってきた
 - b とても冷静な人
- (3) 中国 9-2 上級
 - a * 子どもを虐待したことあるの方々のインタ

ビュー

- b 自分の両親に虐待されたことのある方
- a * 色々のおかしいこととか
- b * 色々の留学の感想とか
- c 色々なもちろんアイデア
- (4) 中国 10-2 上級
 - a * 色々のこと
 - b 色々な問題
- (5) 中国 11-2 上級
 - a * 色々のおもしろいこと
 - b 色々な事件を解決するドラマ
 - c 色々な腐敗
 - d 色々なところがだめです
- (6) フランス 1-2 中級
 - a * 伝統的の服きます
 - b 伝統的とか進んでいる服とか
 - c ? 伝統的なはたくさんあります
 - d ? 伝統的な服、

このことから、同じ語彙を用いても、その中に誤用と正用が混在する「ゆれ」があることがわかる。これはどうしてだろうか。

小林(2001:63)は、「誤用は習得研究に重要な情報を提供するが、それを正しく利用するためには、どのような言語行動(どのようなことをしているとき)の中で誤用が出現したのかという面、どのような言語的特徴の文(どんな文)で失敗したのかという面の両方から考えなければならない」と指摘している。

今回の誤用は発話資料から収集されたものである。つまり、現実の使用場面における誤用であるため、処理時間が短いために、自動的処理が及ばず、誤用が表出された可能性があると言えよう。しかしながら、どうしてその場合に「の」を過剰使用するのかという疑問が残されている。

具体例をみると動詞とナ形容詞にゆれが見られ、その中でも「色々な」に多いことがわかる。また、上級の中国語母語話者に多くみられる。3-4の結果の分析において、学年始めの中級の時点では「の」の過剰使用がみられない学習者であっても、上級になって出現する学習者が中国語母語話者に多い、という見解が得られたが、その5名中4名において、ゆれが観察されている。

運用の際に「の」の過剰使用が出現した原因と、上級になって誤用が出現することとの間になんらかの関連があるのだろうか。上級における、知識と運用という興味深い問題が提示されたと言える。

4-4 言語転移の可能性

以上みてきたように、「の」の過剰使用は、今回の縦断研究の結果においても、これまでの先行研究と同様、中級の発達段階において、母語に関わらず生じる誤用であると言える結果となった。また、「の」の過剰生成の誤用の要因として、学習者の、ある表現を一固まりで用いるという言語処理のストラテジーが関与している可能性も否定されなかった。

しかしながら、横断的な分析結果に加え、縦断的な分析からも、中国語母語話者には上級段階になっても「の」の過剰使用による誤用が多いという結果が示され、やはり言語転移の可能性は拭い去れないものであると言える。さらに今回の縦断的な分析の結果から新たに示された二点も言語転移に関わる問題である。一点目は、中国語母語話者には、学年始めの中級の時点では「の」の過剰使用がみられない学習者であっても、上級になって出現する学習者が多いという結果である。これは、これまでの第二言語習得研究において一般的に言われている言語転移の様相とは異なっている。第二言語習得研究における言語転移は、目標言語の知識を補うために、母語の知識を借用することから、これまで初級に一番多く見られると報告されてきている(Corder 1981, Taylor 1976)。また、言語転移は、化石化を引き起こす原因の一つとしても指摘されているが(Selinker 1972)、今回の結果は、中級に出現しているものが引き続き上級にも見られるというよりも、上級になって出現・増加している点から単純に化石化とは言えない。また、先述のとおり中国語を母語とする上級学習者の大半に、同語彙中における正用と誤用のゆれが見られたことから、上級になり、内容的にも量的にも、多く色々なことを話そうとして、モニターが下がり、言語転移の影響によって誤用が産出された可能性が推測される。言語転移の様相は、先行研究で言われるほど単純なものではなく、かなり複雑であることを示唆していると言えよう。この点については、中国語の言語転移の可能性が示される「の」の過剰使用と知識と運用の関連性を検討し、今後探っていかなければならない。データの妥当性を含め、今回の結果が示す意味について追求してゆくべき問題であると考ええる。

二点目は、上級中国語母語話者の個人内の「の」の過剰使用は、イ形容詞、ナ形容詞、動詞のうち複数の種類にわたって見られる傾向があるが、他の母語話者にはいずれかにしか出現しておらず、異なった傾向がみられたという結果である。この点に関しては、言語間の構造上の違いをふまえ、品詞と誤用との関係から言語転移の可能性を検討する必要がある。例えば、以

下の各言語では、修飾部の品詞によって異なる言語的手段が用いられているが、中国語だけはどの品詞の場合でも一様に「的」が用いられている。以下に、修飾部の品詞ごと（名詞・形容詞・動詞）に、「の」に相当するマーカーを網掛けで示す。

日本語：花の色・小さな犬・走っている車

韓国語：꽃의 색・작은개・달리고 있는 차

英語：color of flower・a small dog・
the car which is running

西語：el color de la flor・un perro pequeno・
automovil de carreras

仏語：La couleur de la fleur・petit chien・une
voiture eu etat de marche

独語：die Farbe der Blume・ein Kleiner Hund・
ein fahrendes Auto

中国語：花的顏色・很小的狗・在跑的车

このことから、中国語母語話者には品詞に関わらず「の」の過剰使用が見られるという、誤用と品詞との関係における傾向は、中国語の言語転移が要因である可能性が大きいと考えられる。言語転移の問題は、今回の分析を踏まえ、慎重にその様相を追求するつもりである。

5 まとめと今後の課題

本研究では、第2節で提示した先行研究の問題点を踏まえ、上級を含めた複数の母語話者を対象として縦断研究を実施することにより、これまでの「の」の過剰使用に関する仮説に新たな知見を示した。主な3点は以下の通りである。

- (1) 「の」の過剰使用には学習者の固まりで処理する戦略が関わっている可能性がある。
- (2) 中級レベルで見られなかった「の」の過剰使用が、10ヶ月後の上級レベルの段階になって出現する学習者が中国語母語話者に多く見られる。
- (3) 中国語母語話者は、他の母語話者と比べて修飾部の品詞に関わらず、広範囲に「の」の過剰使用が見られる。

(1)は、「の」の過剰使用は言語転移によるものではないという第一の仮説を支持する要因であり、(2)、(3)は中国語の言語転移であるという第二の仮説を支持するものである。本研究では「の」の過剰使用に対する両方の仮説を支持する結果が示されたと言えよう。

さらに、(3)に関して、「の」に相当するマーカーの言語間の違いを調べた結果、品詞に関わる誤用の傾向は、

中国語の転移である可能性が高いことが明らかとなった。そして(2)に示された誤用の出現の仕方から、第二言語習得過程における言語転移の様相は、従来の研究から指摘されている「化石化」や、目標言語の知識不足から母語に頼る「借用」と言われるものだけではなく、もっと複雑であることを示唆しているようである。

学習者の「の」過剰使用は、先行研究で見解の相違があった言語転移か否かという問題ではなく、母語に関わらず共通の部分はどこか、「いつ、どのように、どれくらい」言語転移が作用するのかを明らかにする必要があると言えよう。言語転移の現れ方にはどのようなパターンがあるのか、それはなぜか、他の要因も含めて、今後慎重に考究してゆきたい。

(注)

- (1) The American Council on the Teaching of Foreign Languages(ACTFL)のOral Proficiency Interview(OPI)における基準を指す。OPIでは、第二言語としての口頭運用能力を、大きく初級・中級・上級・超級の四つのレベルに分ける。
- (2) 90人分のOPIテープを文字化した言語資料(鎌田1999;山内1999)。
- (3) 韓国人幼児は来日2ヶ月目から11ヶ月間、成人2名は来日直後より2ヶ月ごとに18ヶ月間調査されている。このことから、調査開始時は初級であり、白畑(1994)に挙げられた被調査者の全名詞句例から、調査最終時においても上級には達していないと判断した(例:「ひとつたてものにかいつかう」白畑1994:186)。
- (4) 迫田(1999)では「付加」という表現を用いているが、ナ形容詞の語幹として「の」を「な」の代わりに使用すること対象とすることを考慮し、本研究では「過剰使用」という表現を用いる。
- (5) 1999年9月(秋期コース開始)～2000年7月(コース終了時)に採集されたデータと、2000年4月(春期コース開始)～2000年2月(コース終了時)に採集されたデータを対象とした。
- (6) 学年始めと終わりにおいて、異なるOPIテスターによって会話調査は行われたが、いずれもOPIテスターのトレーニングを受けた有資格者であるので、会話調査の手順などの統一は保たれている。
- (7) 本調査の方法は迫田(1999)の横断的資料と同様のACTFL OPIに基づくテスターと学習者の会話を対象としており、その横断的資料との比較を行うという観点からも、基本的に迫田(1999)の分類にならう。

- (8) (母語・被調査者番号－発話調査時期〈1が学年始め、2が学年終わり〉・レベル)を表している。
 (9) 「*」は誤用を意味している。

主要参考文献

- 奥野由紀子(2000)「第二言語習得における言語転移の証—先行研究からの課題—」『教育学研究紀要』中国四国教育学会 第46巻 第2部 pp.384-389.
- 鎌田 修(1999)「KYコーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』(科学研究費補助金研究成果報告書) pp.227-237.
- 家村伸子・迫田久美子(2001)「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(2)—否定形「じゃない」の場合—」『広島大学日本語教育研究』第11号 広島大学教育学部日本語教育学講座 pp.43-48.
- 迫田久美子(1999)「第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』科学研究費補助金研究成果報告書 pp.327-334.
- 迫田久美子(2001)「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)—場所を表す「に」と「で」の場合—」『広島大学日本語教育研究』第11号 広島大学教育学部日本語教育学講座 pp.17-22.
- 白畑知彦(1993a)「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成—韓国人幼児の縦断研究—」『日本語教育』81号 pp.104-115.
- 白畑知彦(1993b)「連体修飾構造獲得過程における化石化現象」『平成5年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.55-59.
- 白畑知彦(1994)「成人第2言語学習者の日本語の連体修飾構造獲得過程における誤りの分類」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』第44号 pp.175-190.
- 永野賢(1969)「幼児の言語発達—とくに助詞「の」の習得過程について—」『島田教授古希記念国文学論集』関西大学国文学会 pp.405-418.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 山内博之(1999)「OPI及びKYコーパスについて」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』(科学研究費補助金研究成果報告書) pp.238-278.
- 山岡俊比古(1997)『第2言語習得研究』桐原ユニ
- 横山正幸(1990)「幼児の連体修飾発話における助詞『ノ』の誤用」『発達心理学研究』第1巻 第1号 pp.2-9.
- S.ピット・コーダー著 玉川学園学術教育研究所(1988)『中間言語入門』三修社.
- Clancy, P. M. 1985. *The Acquisition of Japanese*. In *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition (vol.1)* ed. by Slobin I.D., Lawrence Erlbaum Associates Publishers. Hillsdale; New Jersey, pp.373-524.
- Corder, P. 1981. *Error Analysis and Interlanguage*. Oxford University Press.
- Corder, P. 1983. A role for the mother tongue. In *Language Transfer in Language Learning*, ed. by Gass, S., and Selinker, L., Rowley, MA: Newbury House.
- Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, P. 1976. The use of overgeneralization and transfer learning strategies by elementary and intermediate students of ESL. *Language Learning*. 25,1, 73-107.

(指導教官：縫部義憲)